『週間読書人』一九六二年十一月十九日（週間読書人）

〔書評〕岩橋文吉著『ソ連の教育見たまま』

掛け値ないソ連教育の姿

人間の真実としての教育が語られる

矢口　新

ソ連の教育はよくわからないというのが定評であるが、行ってみることが出来なければソ連に限らず、どこの国だってわかりっこない。官僚の公式発表だけを聞いていたのでは、日本の教育だって、日本人自身にわからないであろう。しかし雪解け以来、多少でも見せてくれるようになったら、あとは見る人の眼光次第である、ところがこれまでよくわからなかったのは、見る人の方にも問題があった。そういっては失礼だが、多くの場合、眼のにごった人のレポートが多かった。なんでもかんでもイデオロギーのちがいにしてしまうという考え方が強くて、眼をにごらせてみていたのである

本書の著者は、そういう点では現在ソ連の教育を見る最適任者であろう。それは序文に平塚教授が書いておられるからここでは述べない。ただ著者についてはわたしはまた異なった思い出をもっている。著者と私は、五年前に国立教育研究所で共に実態調査に従事していたが、その頃から調査に独特の才を発揮して、掛値なしの実態をつかむには妙を得ていた。しかもそれには実に克明な観察の裏づけと、時々いたずらっぽい奇抜なユーモラスな着想が混然として一体をなしていた。

『ソ連の教育見たまま』には、それがそのままはつらつと出ている。それを二年間の英国留学が更に幅広いものにしている。この中には聞いたこと、見せてもらったこと、それから自分で見たことの三つが混然一体となって、ソ連の教育と社会の実態を浮き彫りしている。そこには、社会主義統制の国であっても、やはり人間の営みであって、統制されないところもある。かくそうとしてもあらわれるところがある。理論をのりこえて、すぐれた人間性が出ているところもある。誰かが「あらゆる時代は神に通ずる」といったが、あらゆる社会は神に通ずるといえそうである。そういう人間の真実としての教育が語られている。教育者必読の書。

Ｂ６一八二頁・三八〇円
慶応通信／東京都港区芝三田綱町一

（やぐち・はじめ氏＝国立教育研究所員・教育学専攻）
★**いわはし・ぶんきち**氏は九大助教授・比較教育学専攻。広大卒